

愛知県名古屋出身の写真家、東松照明氏（1930-2012年）。

戦後日本を代表する写真を数多く生み出した東松氏ですが、惜しくも昨年亡くなりました。

そこで、近年、東松氏の大規模な展覧会を開催した愛知県美術館と名古屋市美術館の担当学芸員が、東松について語る特別対談「追悼 私が出会った東松照明」を3月22日の夜、行いました。

愛知県美術館からは古田浩俊企画業務課長、名古屋市美術館からは竹葉文学芸員、企画と司会は愛知県美術館の中村学芸員です。





↑ コレクション展の中の東松特集コーナーを、特別にしつらえました。

展示室にて対談、というこれまでにない趣向で行ったところ、作品を前にしているためか、会話も徐々にヒートアップ。

名古屋市美術館と愛知県美術館が東松の展覧会を開催するにいたった経緯の裏話から始まり、東松が1968年に「写真100年—日本人による写真表現の歴史」展の企画に関わった際のエピソードなど、ここでしか聞けないお話ばかりでした。



また、作品ばかりでなくこういった活動を振り返ると、東松氏が一枚、一枚の写真を生み出すだけではなく、歴史やジャンルといった広い視座から写真を眺め、その視座自体を作り出す能力にも恵まれていたことが分かります。



↑ 穏やかな古田さん（右）と、熱く語る竹葉さん（中央）。

戦後の日本を切り取った硬質なモノクローム写真から、デジタルのカラー写真まで、実に多彩な表現を行った東松照明。あらためてその存在の大きさが痛感されるイベントとなりました。

そして、名古屋市美術館から愛知県美術館までお越しくくださった竹葉学芸員、ありがとうございます。何か次なる研究目標もおありの様子。また、色々とお話くださいね。

(F.N.)